

桜姫の純情と貞節：鶴屋南北作『桜姫東文章』より

中村， 恵
九州大学大学院（修士課程）

<https://doi.org/10.15017/11903>

出版情報：語文研究. 72, pp.22-32, 1991-12-25. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

桜姫の純情と貞節

——鶴屋南北作『桜姫東文章』より——

中 村 恵

はじめに

『桜姫東文章』は、昭和四二年に郡司正勝によって復活上演され、昭和五〇年に五世坂東玉三郎が桜姫を演じて当たり役となって以来、数度にわたって上演された。そのたびに様々な劇評や論文が発表されたが、その中で桜姫の人間像については、「性的」「肉体」といった言葉で語られることが多かった。これらは郡司氏の「現代の視点で、この桜姫の人間像を捉えんとすれば、またいろいろな角度があらわれる。この桜姫から、女性のセックスが、階級を打破している美事さをよみとることもできるし、また女性がセックスによって解放されるとき、転落につながるものだということも、また、セックスを中心とした女の一生をみることもできよう。」(古典劇としての南北との対決「新劇」昭和四一・三)といったような現代的解釈にもとづくテキスト・レジーや演出の影響を受けたものだろう。古典劇を現代の観客を対象として復活するときには、ある程度の現代的解釈をまじえることは否めないし、意義あることだと思

う。しかし、その現代的解釈をもって、原作者南北が「女の肉体を書いているのだ。」(青江舜二郎氏/物理の先生と器械体操「演劇界」昭和四二・二)とまで言ってしまうのはどうか。そういった現代的解釈をまじえずに原作を読み込んだ場合にはどういった桜姫像が得られるのか、またその桜姫によって南北がねらったものは何だったのかについて論じていきたい。

一 権助への執着

桜姫は、長谷寺の僧・清玄の若い頃の男色相手で、清玄との心中に失敗して一人先立った稚児・白菊丸の生まれ変わりであると設定されている。前世では女に生まれ変わって清玄と添い遂げることを誓った桜姫であったが、生き残った清玄を愛することをせず、屋敷に忍び込み桜姫の操を奪った男・権助に執着することになる。桜姫は、一夜で宿した子を人知れず生み落とし、他の男との縁談を拒むため長谷寺で出家しようとする直前に権助に再会する。二人は夫婦の契りを結ぶが、その密通の現場を押さえられ、桜姫は非人に格下

げされてしまふ。権助はうまく逃げおせ、濡れ衣を着せられた清玄が桜姫とともに罪を被ることになる。

桜姫が顔も名前も分らない男に執着することについて、多くの論は、たった一夜の男の肉体が忘れられないためだと解釈している。それをもとにして桜姫は肉欲に憑かれた淫婦のようにとらえられる。権助に操を立てて他の男を拒み、出家まで考えるという淫婦らしからぬ行動をとっているのにもかかわらず、それについて松田修氏は「桜姫が、強姦者それも顔も見知らぬ男に、操を立てるとは、一夫一婦の観念に囚われてのことか、それとも観念などない肉体のみの存在であるか、おそらく後者であろう。」(「桜姫東文章」の「桜姫」業を知らぬ業の女「国文学臨時増刊号」〈古典の中の女一〇〇人〉「昭和五九・九」と言われる。しかし、桜姫にとって権助が「肉体のみの存在」であるということ、その権助に「操を立てる」とことは直接にはつながらないのではないか。「操を立てる」のにはどうしても観念が必要はずだ。

この桜姫の権助に対する執着を本文にそつてみる。長谷寺での出家の直前に権助に再会した桜姫は次のように言う。

△序幕・桜谷草庵の場▽

桜姫 逢て心に恥かしい又その中にとどふかして、逢たい事も折にふれたとえ良からぬいとなみを、する人迎も姫御ぜは、一度なりとも肌ふれて。

権助 外に男は持つまいと、思つた処が名所も、知れまいとつて夜盗の仕業。

また桜姫は、非人にされた後、もう一度権助に会うことができる

のだが、そのときにもこんなふう言っている。

△五幕目・岩淵庵室の場▽

ト駈寄つて権助に緋り、

桜姫 コレ逢いたかつたわいのく。いつぞや長谷の桜谷、わたしが閑居へ来やつた其方、初手に逢うたるその時とは、姿形も相違して、見紛ふばかりの賤しい下部。たとえ其方は下様の、氏系図無き者にもせよ、妾が初めて見えし御殿。悪縁契り深きといふ、譬へに違はぬ、可哀やあの子も。

(三一九頁)

傍線部の桜姫の台詞から、姫にとって権助は初めて体を許した相手であるから、たとえどんな男であっても添い遂げなくてはならぬという強い気持ちが読み取れるはずである。その気持ちを裏付けているのは確固とした貞操観念である。桜姫が武家の娘らしく貞節であろうとする様子は次のような場面からうかがえる。

桜姫は清玄とともに非人に格下げされ、河原でさらし者になっている。二人の処置を任されている非人頭の番八が、桜姫に向かって清玄と夫婦になるよう勧める。

△二幕目・稲瀬川の場▽

番八 ……いつそアノ清玄さまに、還俗させて、おまえの御ていしゆになされてはどふでござります。そふすれば夫婦ぐらしの友かせぎ。さやうなされませく。

ト桜姫抱子を抱へうつつむいてゐる。

桜姫 かかる身となる事さえも、心ぐるしく思ふのに、また夫を重ねよとは、女の道を捨てさすか。

(二八七頁)

この後、桜姫の夫になることを決心した清玄が桜姫に関係を迫る。

清玄 互ひに心一致のしるし、そなたの力となるからは、：
……一度の枕は二世のかため、この身の破滅がたしかな証
拠、心安かれ桜姫。

桜姫 サ、あなたが左程深実に、力にならふとおつしやつて
くださりまするは嬉しいけれど、ご覧の通りこの幼子、さす
れば男のある身にて。

(二八九頁)

桜姫は「女の道を捨てさすか。」という強い言葉で清玄と夫婦にな
ることを拒絶する。また、清玄と関係を持つことも、子まで成した
男がいるという理由で断る。これらから、桜姫がしっかりと貞操観
念をもっていることが分かるはずだ。

桜姫の権助に対する執着は、落合清彦氏が言われるような「一度
で女の肉体のよろこびを教えてくれた釣鐘権助。その時の男の体が
忘れられない。この女の、肉欲にすべてを収斂させてしまう執念」
(零落という名の世界——桜姫とブランチ・デューボワ『百鬼夜行の
樂園』昭和五〇・四) などによるものではない。桜姫は、貞操の観
念によって、初めて体を許した男である権助にこだわるのである。

南北が、この桜姫に、武家の娘らしい貞操観念を持たせたことに
は注目すべきである。桜姫は、名も知らぬ男の子どもを生み落とし、
腕にはその男と同じ鐘と桜の彫物までしている。しかし、私生児
「彫物」という事実に戻して、本人はいたって真面目に貞節を口に
する。このちぐはぐな設定こそ南北が狙ったものではないだろう
か。

二 濡れ場

桜姫が淫婦的に言われるのにはもうひとつ、出家しようとしてい
た寺での濡れ場が指摘される。

桜姫が出家の準備をしているところに、桜姫の縁談相手の使いで
権助が現れる。追い返そうとするが、桜姫は権助の腕に見覚えのあ
る彫物のみつけて呼び止める。人払いをして彫物を確認し、思いを
語って濡れ場へと移行していくが、この場面について森山重雄氏は
「罪障感に喘いで剃髪受戒を受けようとする直前に、相手の腕に鐘
と桜の彫物を見た桜姫は、おどろくほどの早さで、性的人間に転身
してしまうのである。」(聖性の喪失・桜姫と清玄「解釈と鑑賞」昭
和五一・一一)と言われる。しかし本文はどうだろうか。

△序幕・桜谷草庵の場▽

桜姫 サア守育んも憚るこの身。藁の上よりこれもアノ、長
浦がしるべとやら、賤の手しほにある者を、付きく逆も誰
あつて、知らぬ男へ心を尽くし、縁組み厭うばかりに、勿
体乍仏を偽り、剃髪受戒の際となり、逢ふたも尽ぬ一人が
中。

権助 そんなら坊主になることは。

桜姫 なんのこふして逢ふからは。

権助 そんならやつぱはお姫様か。

桜姫 あれまだそんな。

権助 そしてなんだへ、○

ト言い乍、桜姫へしなだれる。桜姫顔を隠す。

コレサなんだよ。

桜姫 そなたの ○ 女房とやら。

トよぶくにいふ。権助思入。

権助 デモおれが身は知る通り。

桜姫 アコレ ○ みづからさへいわぬなら。

権助 マアそりやアそんな物サ。

桜姫 そんならこれから、

権助 女房だぞへ。

桜姫 ハテナんの偽り。

権助 併し折助にお姫様。とんだ夫婦だ、○

久しぶりだの、○

ト思入。独吟になり、これにより権助、桜姫の帯を解懸かる。寺鐘になり、桜姫悔りして下へおりる。

権助 我帯を解、いろく思入。唄一トクサリ切れる。
なぜく、おまへ女房じやないか。女房ならおれが自由に。

桜姫 サアそりやあ自由にはなるけれどな。
権助 けれどならば、かふするは。

ト又独吟になり、桜姫を無理に二重へ上げ、経巻を枕にして桜姫の下じめをも解に懸る。桜姫恥敷思入。兩人いろくあつて、ひつたり抱付。権助看板を二人が上へ引懸る。チョンと簾下る。

(二七六頁)

ここで桜姫は「縁組み厭うばつかりに、勿体乍仏を偽り、剃髪受戒の際」となったと言っており、「罪障感に喘いで」いたと言いはし難い。会うことができない権助に操を立てる手段として出家をしようとしていたのであるから、その権助に会えたとき、出家をする気が無くなったとしても当然のことだと言えよう。

さらにこの場面で、権助に身をまかせせる桜姫が、「性的人間に転身」したと言えるだろうか。権助にしなだれかかられて桜姫は顔を隠す。せつつかれて、ようやくと女房になりたいと口にする事ができる。権助が桜姫の帯を解こうとする寺の鐘が鳴り、桜姫はびっくりして権助から逃げる。そのときの権助の「なぜくおまへ女房じやないか。女房ならおれが自由に。」という台詞から、桜姫がわずかながらも抵抗していることが読み取れよう。「サアそりや、自由にはなるけれどな」という台詞には、恋はしているも積極的にはなれない純情さが感じられる。そんな桜姫を権助は無理に二重へ押し上げて、下じめを解き、そこで桜姫は「恥敷思入」である。

この濡れ場について松崎仁氏は次のように言われている。
……そこで思いきった煽情的な濡れ場になるのだが、このあたりの進行では、男を恋焦がれていながらもうぶな女の恥じらいが強調されていて、六幕目の悪婆めいた対照をなすように書かれているのである。……

「唄一トクサリ」の間に、桜姫の恥らいと抵抗が表現されたはずである。国芳画くこの場面の錦絵の印象は強烈であるが、台本では姫の「恥敷思入」が終始強調されていることを見逃してはなるまい。先年の演出ではこの点に疑問があった。

(桜姫東文章作品論「国文学」昭和四六・九)

先年の演出とは、昭和四二年の郡司氏による国立劇場での復活上演を指す。郡司氏の「演出ノート」によると、桜姫が進んで権助の帯を解くという演出がとられていたことが分かる。また昭和五〇年の上演の際にも、桜姫が自ら自分の帯を解くという積極的な演出がとられていたことが、そのときの劇評からうかがい知れる。

もとの台本の「恥敷思入」を生かすか否かは、上演の方針に左右されることだが、全く正反対に性的に積極的な行動をとらせることは、原作の桜姫像をくつがえしかねないことに注意すべきである。

原作の桜姫は純情に描かれている。純情がゆえに初めて体を許した男にこだわり、武家の娘らしい貞淑さでその男に操を立てる。しかしその姫には私生児がおり腕には彫物がしてある。その上、操を立てている相手は、人殺しも平気とする無頼漢である。権助に「併し折助にお姫様。とんだ夫婦だ」と言わせているが、このギャップのおもしろさは、そのまま桜姫に体現化される。桜姫は、純情で貞節でありながら彫物があつて私生児がおり、後には姫の気性を残したまま安女郎となるのである。

「稲瀬川の場合」で、無理矢理返された赤ん坊を桜姫が抱いて立っているという場面があるが、それについて渥美清太郎氏が「赤坊を抱いた赤姫はちよつと變つた姿で、これも南北がどんなもんだいと自慢したことでしょう。」(鑑賞読本桜姫東文章「演劇界」昭和二九・五)と書いておられる。この赤姫が、いかにも恋人でも私生児でもないような淫婦であるよりも、純情で貞淑なお姫様であつたほうがぐつとおもしろみが増すはずである。

三 放浪

桜姫は、非人となつて河原に置去られた後、清玄とはぐれ、放浪して偶然権助に出会ふが、彼によつて女郎屋に売られてしまう。姫から安女郎へと転落の運命をたどる桜姫について、ドナルド・キーン氏は「自分を犯した盗賊を愛し、力になると申し出られれば阿蘭

梨を夫とするのもいとわれない。下等な女郎屋へも、なんの抵抗もなく売られていく。……その自堕落さは、かえつて蠱惑的である。」(『日本文学史近世篇』昭和五二・七)と言われる。これによると桜姫は「自堕落」な性質によつて自らを破滅に導いたかのように思える。しかし、権助に執着するのは、「自堕落」とは駆け離れた純情さによるものであるし、その後の転落も「自堕落さ」のためとは言い難い。むしろこれも姫君らしい世間知らずのためである。

稲瀬川の河原で、清玄と夫婦になることを桜姫はキツパリ断つた。しかし番八はひるまず言葉を変えて口説く。

番八 ……貴つて置いた酒肴、還俗なされて御祝儀に。モ

シお姫さま、おまえさまから清玄さまへ、一ツ上げてお差しなされませ〜。さやうなさるとおまえ方はわしらが仲ヶ間の足を洗つて素人衆になられます。仲間へ祝儀を出しさえなされば、町人にでも百姓にでも、勝手な者になられますよ。

トすゝめる。桜姫思入あつて、

桜姫 スリヤ何といやる。一つたん罪に伏したる自も、

番八 ずいぶん足を洗つて、素人に戻られますのサ。

桜姫 素人とやらになれば、我身達の仲間とやらではない

といひやるか。

番八 左様でござります。

桜姫 そんならそなた、よいよふに頼むわいの。(二八八頁)

ここで桜姫は素人になるということが、他の男を夫にすることになつてしまふのに気づいていない。「素人とやら」「仲間とやら」と言うところをみても、桜姫は番八の言葉がよく分かつていないし、「よいよふに頼む」と言えば、まさか自分の意に反するようには

からってくれようとは思ってもみない。今までの桜姫は「よきにはからへ」と言えば、本当によいようにはからってくれる家臣達に囲まれていたはずだ。こんなふうにお姫様が、お姫様の気性のままで世話の世界に迷いこんでくるから妙なことが起こるのだ。

それが夫を持つことを示すと知らぬまま、桜姫は清玄に力になってくれと頼むが、悩んだ末に承知した清玄が関係を追ると、驚いて拒絶する。そこに桜姫の元許婚・入間悪五郎が現れて、姫の子どもを人質にして桜姫を我がものにしようとするが、姫が承知しないので子どもをさらってしまってしまふ。姫はさらわれた我が子を求めて、清玄を置き去りにして放浪するのであり、赤子は偶然清玄が拾うことになるが、決して「子供を清玄におしつけたまま」(落合氏)姿を眩ましたわけではない。

桜姫は放浪するうち見世物師・勘六に拾われる。勘六は頃あいを見て姫をどこかに売る気であるのだが、世間知らずの桜姫はそんなことには気づかない。

偶然権助に出会い、結局売られることになることも同様である。権助は桜姫とかわらぬ夫婦と誓い合うが、桜姫の大風なのは嫌気がさしている。

権助 ……何を云うにもわしやア貧乏人の事だ。お姫様を女房に持たうが。腰元やお局を遣はせて置く工面は出来ねえよ。マアわしらが嗚アにならうと思へば、そんな形をして居てはましよくに合はねえ。茶微塵の袷に、松阪縞の前垂の、紐を廻して帯の代わり、…………長屋歩きと朝寝が御朱印、そこからうんと出にやア、裏店つきあいは出来ねえよ。

桜姫 何ぢややらそのやうな雲上な事は、自は存ぜねど、其

方ようやうに指図してたもや。

権助 エ、お前もいゝ事を云ふぞ。嗚アの身持を悪くするを、亭主が一日内に居て、その指図ばかりしては、商売がお留守になるわな。マ、コレ、どこぞへ頼んで人柄の、悪くなら稽古をさせたいものだが。

桜姫 歌、連歌の稽古とは違ふものかや。

権助 違わねえでどうするものだ。ア、コレお前をどこぞ遣つて置く所を。オ、あるぞく。先刻お前をこゝへ連れて来た山せげんの勘六、あの男に相談して、四六屋体へでも預けて置くが早廻りだ。…………… (三一九頁)

こうして桜姫は連歌の稽古をしに行くような気分で、何も知らず女郎屋に売られていくのだ。

世間知らずの桜姫が、権助や勘六などかわすちくはぐな会話は、思わず笑いを誘うように書かれている。これは落語「たらちね」にも通じる笑いだ。この笑いを成立させるためには、桜姫は姫らしくなくてならぬ。南北は、桜姫の姫らしさを保ったままで恋人と子を持たせるために、権助を聞に忍ばせるといふ方法を用いたのではないか。強姦は、たとえ淫婦であろうと純情であろうと屈辱的行為であることかわりない。ところがそこに、処女の純情と姫の貞淑さを逆手にとって、かえって権助を慕わせるというつくり事をもってきたところに南北の手腕が発揮されている。

三 風鈴お姫

桜姫は、安女郎となり、腕にある鐘の彫物が小さくて風鈴のよう

に見えることから「風鈴お姫」と異名をとってはやっていると、枕元に幽霊が出るので商売にならないと権助のもとに連れ戻されて来る。その風鈴お姫は今までの桜姫とはガラッと変わっている。女郎屋の女将が「下素ばり」に仕込んだものの、姫の氣質が抜け切れず、下素なことばにところどころ姫のことばが混じった妙なことをしゃべっており、桜姫役の見せ場の一つとなっている。

権助の家に、赤子を抱えたお十という女がいるところに、桜姫が戻されて来る。

△六幕目・山の宿町の場△

……お十抱子をいぶり付けている。桜姫のさくくと、権助が傍へ来て、お十を見てむつとした思入。

権助 お姫や、又のお帰るか。よくくらがへに出るの。手まへも判人の為になる女だ。

桜姫 判人衆の為にやアなるが、ていしゆの為には○ わらは、ならぬかへ。コレみづからがくらがへより、アノ○ アノ女はどつからつれて来たのだ。これ、口広いこつたが、ぬしの下夕齒と極つた女子はみづからより外、この日本に二人とあつていゝものかな。そのうへにまだいとけなき、アリアア、アノ女の子か。とつけもねへ、お乳や、めのとにいだかせて、養育あらばイザしらず、みかすからなぞは子供はきらいだよ。アゝしみつたれな。すかねへ事をよしねへな。

トこの内権助よく聞いていて、

権助 勘六どんや、ちつとの内いつて居る内に、せりふはよつぽど仕込まれたと見得たが、どふしてもまだ、お姫様がぬけねへわへ。

勘六 その筈だはな。根が生まれが生まれだから、どこぞのかいまがりにやア地がねがでるよ。

桜姫 よしねへな。なんぞといふと、そなた迄がそんな事をいふが、性はこれもの、あのたらちねの朝な夕なに○ ヲヤ、又つまらねへ事をいゝそうだよ。

権助 なる程、こいつはお姫様の中へ、悪婆を当分に浚いだんだから、手打ちならつなぎといふ所だが、どふでもこいつは継つ子が出来そふなこつたよ。 (三三〇頁〜三三一頁)

五幕目で権助に再開したときは、「駆寄つて権助に絶がり、コレ、逢ひたかつたわいの〜。」と言つた桜姫は、今では「のさく」と権助が傍へ来る女になつて居る。五幕目と六幕目の間で、桜姫は女郎という境遇を経験しており、言葉だけでなく姫の人格の中にも女郎らしさと姫らしさが混在しているのである。お十を見てむつとした桜姫は、相変わらずの貞操観念をふるって文句を言う。姫の姿とことば遣いと、言っている内容とが不釣合であるのが笑いを誘うところである。

権助は「お姫さまの中へ、悪婆を当分に浚い込んだ」と言っているが、生地の「お姫さま」が、松崎氏の言われるように「悪婆めいた桜姫と対照をなすように書かれて」いなければ、このおもしろみは半減するであろう。もとの桜姫が純情で貞節であつたことは、風鈴お姫となつてからも効いてくるのである。

権助が寄り合ひに出かけて一人残された桜姫の様子をみてみる。

桜姫 ……ヲヤ今夜ばつかりは、手めへのからだのよふだ
○ 手なれし爪琴あるならば、今宵のうさを○ しかし琴の組より、新内ぶしの方がよつ程気が聞「利」ている。どれ、

ころ寝とせふか、○

ト夜着を着ようとす。抱子しきりに泣。

桜姫 ア、何だな、枕元へやかましいものを置いていったの、コレ権助さん、この子もおめへつれて行ねへな。コレねられねへわな、○

ト思入あつて、

ア、思へばわらわもアノよふな、つぼみの花のみどり子を、捨ていまではこのよふな、姿詞も浅間しい。これが吉田の、

○

トこなしあつて、あたり見廻し、

ヲヤ客人が聞かと思つた○ いつもは廻しでうるさいに、今夜ばかりはごく極楽といゝたいが、また松井町へでも、かせがせるであらう、○ (三三三三頁)

桜姫の人格は、小塚原の女郎・風鈴お姫と、吉田の息女・桜姫との間を行きつ戻りつしている。ふと吉田の息女の顔になると、現在の自分の姿を嘆くことはがもれ、はっと我にかえて辺りを見回す姫は以前の世間知らずのお姫様ではない。お十が身代わりとなって小塚原の女郎屋からは解放されたのだが、権助がまた別の女郎屋に売り飛ばすだろこと予想しているのも大きな変化である。

桜姫は風鈴お姫となった後にも、吉田の息女としての自覚を持ち続けている。これは最後の勤助殺しを可能にする要因となるはずである。

四 殺し

桜姫は二度人を殺す。一度目は清玄である。河原ではぐれた後再び桜姫に出会った清玄は痛みほうけた上に弟子に殺されかけた体で、刃物を持って関係を迫る。拒絶する桜姫が清玄と揉み合つうち、偶然刃物が清玄の喉をかき切ってしまう。死んだ清玄は幽霊となつて桜姫につきまとう。そのために女郎屋から戻されることになるが、再び現れた清玄の幽霊を、桜姫が恐れず罵倒する場面は有名である。

二度目は我が夫、権助である。権助が実は桜姫の父と弟を殺した敵であり、家宝「都鳥の一巻」を奪い吉田家破滅の危機を招いた盗賊であったことを知ったとき、桜姫は自らの手で権助を刺し、我が子までを刺し殺すのである。そして家宝を取り戻し、家臣達に守られて吉田家再興を目指すところで幕切れとなる。

この権助殺しについて、広末保氏は次のように言われる。

……風鈴お姫の伝法な言葉のなかに吉田家の息女桜姫の言葉がまぎれ込むといった類^唐唐的な「悪」の美は……執念ぶかい清玄の幽霊を戯画化し、退散させてしまふ。それだけでなく、

桜姫（風鈴お姫）は清玄の幽霊から得た情報によって自分の男

（夫）の権助を殺す。権助によって転落させられた桜姫は、その転落によって得た行動力で、敵とわかった権助を殺す。

（歌舞伎オン・ステージ5「桜姫東文章」解説 平成二・七）

このように、桜姫が清玄の幽霊を退散させ、清玄の幽霊によって権助が敵であることを教られると指摘する論は多くある。ところが本文をみると、桜姫は自分自身で幽霊を退散させるわけでもないし、清玄も権助が敵であるとは教えない。

桜姫 ……………

コレゆれいさん。イヤサそこへ来ている清玄のゆれいどの、付まとう程な性があらば、ちつとは聞訊たがいゝわな。みづからが先々をくらがへするのをもそなたの死霊が付まとうゆへ、なじみの客まで遠くなるわいな。エ、人のかせぎのじやまをするのか。……コレいつぞや何といつたな、わらわはしらねどそつちから、桜姫が前生は児白菊といやつたからは、いわばそなたにこつちから恨みこそあれ、恨まるゝ、コレ、咄しはねへよ。それぢやアそつちが横といふものだ。よし恨つらみがあるふが儘、北白川にあるならば、神祇官の吉田の館、禁延の御政事をとり行ふ少将惟貞、どふして死霊が来られよふ。今こふしたしがねへ身になつていゝると思つて、みづからを見くびつて、壁に見たゆへ付まとうか。世になき亡者の身を持て緩急至極。エ、消えて仕舞ねへよ。

ト急度いふ。清玄の死霊思入あつて、抱子にゆびをさす。桜姫こなしあつて、

エ、何、そんならこの子がわらわが腹に誕生の。エ、スリヤ、アノ忍び男は、げんざいの清玄どの、実の弟というのかへ。コレ、そりやアノ、ほんの事か。コレ我子かいの、ト抱上んとする。どろくにて清玄の死霊、桜姫をそばへよせぬ思入。桜姫もいろくこなしあつて、去りし恨は、我が子にも近付ぬのか。清玄どの、エ、こなたはノウ。

ト思入あつていぜんの刀を見つけ、手早くとり上げ、すらりと抜。どろくにて清玄の死霊たちまち

消へる。桜姫茫然となつて、あたり見廻し、刀を納め、

そんなら死霊は。ア、消えたの。コレ。(三三四頁)

清玄の幽霊は、桜姫に罵倒されたとき、お十が置いていった赤子が、姫の子であることを教える。桜姫は、事実を知つてとりみだし、さつきの勢いは消えてしまふ。そのとき同時に清玄は権助が実の弟であることを教えるのである。また、消えるのは、権助が化物がでたときに使うようにと置いていった刀を抜いたときだ。

桜姫が、権助を敵と知るのには、この後である。桜姫が子を抱いていゝるところに、酔つぱらつた権助が帰ってくる。

権助 ……サア寝よふく。コレサ、そんなしみつたれたがきを抱いていゝと、捨てしまへといふに。

ト抱子を捨んとする。拍子に袂より以前の密書落る。桜姫手早くとつて一寸見て、

桜姫 松井の源吾貞景様へ。信夫の惣太。ヤ。

ト権助に見へぬよふに、今の密書をそろくど行燈の明りにてよむ思入。権助これを知らず、

権助 手まへなんばお姫さまだといつて、おれも侍だは。追付見たがよい。とつけもなく出世するは。それといふのはこれだア、

ト首にかけたる守りを見せて、

こりや守だと思ふが、これでも都鳥といふ一巻だ。……
桜姫 シテその一巻が何ゆへそなた。これをどふして持つ

て居るのだ。

権助 これか、こりやア何よ、その持っていた持主を、これ
ト刀をとつて、

この刀でころしたのよ、その時にこの子ゆびをくわれるやつ
サ。それからこの当地に来て、隅田川で十三三な若衆の
きをぶちころして。サアたづねられるは。こついはむづかし
いと、それからさまをわくくして、やしき奉公していたは。

(三三五頁)

桜姫は、偶然権助が都鳥を盗んだことを示す密書を見つけ、権助は酔っぱらって自分のしたことをべらべらしゃべる。はつと気づいて嘘だと言ひ直したときには、もう桜姫は権助が的であることを確認していた。そして権助に酒を飲ませて眠らせた後、刺し殺すのである。

桜姫が最後に権助を殺すのは、お家物の様式に則ったものであると多くの論が指摘する。それは確かだと思ふが、様式に則るために、それまでの桜姫を置き去りにして手早く決着をつけたと考えるのはどうだろうか。お家物である以上、桜姫が権助を殺し吉田家を再興するという結末は始めから用意されていたにちがいない。桜姫はその結末にむかつていくよう書かれていたはずだ。

身を滅ぼしてまで愛した権助を殺すことの矛盾を指摘されても、もともと桜姫はそんなふうには権助を愛してはいない。初めて体を許したという点で、権助は桜姫にとってかけがえのない存在であり、権助にこだわり続けるのは貞操観念のためである。だまされるようにして女郎になつてからは貞節を通すこともできなくなる。そんな

桜姫には吉田の息女という自覚が見え隠れしている。それは清玄の幽霊にまで「北白川にあるならば、神祇官の吉田の館……」と言っているところからも分かる。女郎となった桜姫に、いまだ吉田の息女としての自覚を持たせることは、権助殺しを可能にするための布石と言えよう。

おわりに

もう一つ気にかかるのは、清玄の幽霊が、権助が実の弟であると教える点である。この場合、清玄の弟であるということは、権助が桜姫の敵であることとは無関係である。それにもかかわらず桜姫にこれを告げているのは何か意味があるはずである。

二人が兄弟であるという設定は、この場面以外では「発端・江戸島尻ヶ淵の場」でしかでてこない。「発端」で清玄に裏切られた白菊丸は、清玄とは全く正反対の悪人・権助を選んだのだが、権助が清玄の血筋であることを知ると、権助を殺し、その子まで殺して血筋を絶つのである。桜姫には白菊丸の生れ変わりという自覚はなく、吉田家の姫として真面目に生きようとしているのだが、その行動の裏には白菊丸の復讐の念が潜んでおり、清玄を破壊に導いていく。このことから、桜姫の吉田家再興の物語は、白菊丸の復讐譚としての一面をもっていると考えられるのではないか。これについては別の機会に詳しく述べたいと思う。

南北は、現代人が期待するような自由な恋愛のために段級を離脱していく女を描いたのではない。当時の評判記が「桜姫後に風鈴のお姫 おし出しのうつくしさから気の替りやう いやはやほめよう

のないほどおもしろい事」(「6役者撰鏡」)と書くように、南北が狙ったのは武家の姫君が世話の世界に紛れ込み変貌するおもしろさである。そのおもしろさのためには、桜姫は姫らしく純情で貞節に描かれていなければならないのである。

〈注〉

*1 文化一四年、江戸河原座初演。桜姫を五世岩井半四郎、清玄と権助を七世市川团十郎が演じた。その後は再演されず、昭和になって復活された。郡司氏の補綴演出作品以前に、昭和二年『清水精舎東文章』(川尻清潭脚色)、昭和五年『当流東文章』(巖谷慎一改修)、昭和三四年『桜姫東文章』(三島由紀雄氏監修)がある。

*2 昭和四六年発行。底本は大阪府立図書館蔵本であるが五幕目が欠けている。他に国立国会図書館蔵本があるが、三幕目までしか残っていないため、欠けている五幕目を『大南北全集』(春陽堂、大正一四)で補ってある。この底本は河竹黙阿弥が書写したという河竹繁俊氏旧蔵本で、原本は関東大震災で焼失しており、それ以前に渥美清太郎氏が写しておられたものによっている。五幕目は重要な幕であるが前後の文脈などから判断して、これを信頼できるものとして本論文中に引用した。

*3 「演劇界」昭和四二年五月号(七月号)に連載されたもので、前掲の「古典劇としての南北との対決」などとともに『かぶき袋』(郡司正勝氏著/青蛙房 昭和四五)に収録されている。

*4 戸板康二氏/玉三郎の新しい顔「演劇界」昭和五〇年七月号

*5 落合氏前掲論文

*6 文政元年刊。国立国会図書館蔵本を参照した。